

「なっちゃんは、ほっとけない」 第5話

水瀬真理佳

登場人物		本 田 夏 海	（9）	（16）	本 田 家 の 長 女、 高 校 2
年 生		西 山 凜	（16）	夏 海 の ク ラ ス メ イ ト	
		藤 井 拓 海	（16）	夏 海 の ク ラ ス メ イ ト	
		橘 龍 太 郎	（16）	夏 海 の ク ラ ス メ イ ト	
		佐 野 聖 也	（16）	夏 海 の ク ラ ス メ イ ト	
		本 田 冬 馬	（6）	（13）	本 田 家 の 長 男
		本 田 春 樹	（0）	本 田 家 の 次 男	
		本 田 秋 悟	（32）	夏 海 た ち の 父 親	
		本 田 七 海	（31）	夏 海 た ち の 母 親	
		山 本 愛 流	（16）	夏 海 の ク ラ ス メ イ ト	
		中 村 康 太	（36）	夏 海 の 担 任	
		吉 田 光 莉	（14）	凜 の 中 学 の 同 級 生	
		北 村 （37）	凜 の 中 学 の 学 年 主 任		
		山 本 陽 子	（34）	愛 流 の 母 親	
		西 山 秀 樹	（46）	凜 の 父 親 で 入 谷 高 校 の 校 長	
		西 山 琴 美	（43）	凜 の 母 親	
		滝 口 （32）	入 谷 署 生 活 安 全 課 の 捜 査 員		
女 医					

○入谷高校・2年A組・中（朝）

机と椅子が比較的真っ直ぐ並び、今までは遅刻していた生徒も、夏海たちの影響でちゃんと席に座っている。

後方には頭に包帯を巻いた愛流の姿もある。

そんな中、教卓前の夏海たちの席が一つだけ空いている。

拓海「結局一週間来なかったか……」

聖也「凜のやつ……！ 電話もメッセージもフルシカトしやがって！」

龍太郎「いつ行っても家は留守だしなあ……どこで何してんだか……」

夏海「どこか西山くんが行きそうな所に心当たりはありますか？」

聖也「俺ら四人でよく行くのはゲーセンかカラオケだよな」

龍太郎「あとは駅前のハンバーガーとか？」

夏海「じゃあ私今日バイトの帰りに回ってみ

ます！」

拓海「俺たちも手分けして探すから、一人で無理すんのはナシな」

夏海「はい、ありがとうございます……」

愛流、心ここに在らずな夏海的笑顔を後方から見つめる。

○病院・診察室（夕方）

愛流、医師の診察を受けている。

女医、愛流の頭部の包帯を外して傷の具合を確認。

女医「傷口はもう大丈夫そうね」

続いて愛流の目にライトを当てて対光反射を確認。さらに指を動かして瞳の動きを確認。

女医「こっちも問題なし、と。喧嘩もいいけど、ほどほどになさいよ」

愛流「……ッス」

○大通り（夜）

愛流、ポケットに手をつ込み、ぼん

やり足元を見たまま歩く。

とあるガソリンスタンドの前を通りか

かった際、女性の「助かりました」

という弾むような声にふと目を向ける。

繋ぎを着た店員が若い女性に給油方法

を教えていた様子。

よく見るとその店員は凜。

凜「……お氣をつけて」

と、事務的に対応。

愛流 M「アイツ、こんなところにいたのか……」

愛流、そのままガソリンスタンドの前

を素通り。

○ 本田家・玄関（夜）

夏海「ただいま……」

夏海が静かに玄関に入ると、冬馬が自

室から顔を覗かせる。

冬馬「おかえり。遅かったな。なんかあつ

た？」

夏海「ごめんね。実は西山くんが最近学校に

来てなくて、バイト終わってから少し探してたの」

それを聞いて、冬馬の顔つきが変わる。

冬馬「夏海：：ちよっといい？」

夏海「うん？」

○同・リビング（夜）

テーブルで向かい合って座る夏海と冬馬。

真剣な表情の冬馬に、夏海も背筋を伸ばす。

夏海「学校で何か嫌なことあった？」

冬馬は首を横に振り、

冬馬「夏海には悪いけど、この際だからハッ

キリ言わせてもらう：：もう入谷の生徒――

――特に西山凜とは関わらないでほしい」

これまでの小言とは明らかに違うトーンに、夏海も丁寧に言葉を選ぶ。

夏海「冬馬の言いたいことはよく分かる。確かに入谷には一部怖い人がいるのも事実だ

し、心配かけてるよね……それはごめん。

でも西山くんは冬馬が思ってるような人と

は違ってね」

冬馬「そんなこと俺だって分かってる！ 夏

海が気にかけるやつなんだから、悪いやつ

じゃないって信じたいよ。けどじゃあ、そ

の手首の痕は？ 当然西山凜とは無関係な

んだな！？」

夏海、テーブルの下にそっと手を隠す。

夏海「これは……でも西山くんのせいじゃな

いの！」

冬馬、小さく息を吐く。

冬馬「夏海が父さんたちの代わりに俺と春樹

を守ってくれるように、夏海を守るのは俺

たちの役目だと思ってる。だから、例え間

接的にでも大事なねえちゃんを傷つける奴

は絶対に許さない、夏海には悪いけど」

そう言って冬馬は立ち上がり、自分の

部屋に戻っていく。

夏海は全身の力が抜けたように背もた

れに寄りかかり、視線の先のキッチン
をボーツと見つめる。

○（夏海の回想）本田家・リビング（夜）

T「七年前」

母・七海（31）、まだ幼い春樹

（0）を抱っこ紐で背負ったまま、夕

飯の支度をしている。

ソファに座ってテレビゲームをしてい

る冬馬（6）に声をかける。

七海「冬馬！ 夏海の洗濯物畳んであげて」 6

冬馬は自分の隣に積みまれた洗濯物を見

て、

冬馬「ええ」

と、難色を示す。

七海「夏海、テストがあるんだって。だから

手伝ってあげよ。ね？」

冬馬「俺だってゲームで忙しいし」

冬馬、ブツブツ言いながらも仕方なく

夏海の洗濯物を畳む。

始めは嫌々やっていた冬馬だが、

冬馬「いいこと考えた」

と、ワルい顔をする。

○（夏海の回想）同・夏海の部屋（夜）

冬馬、畳んだ洗濯物を抱えて夏海の部屋のドアをノックして開ける。

中では夏海（9）が学習机に向かって勉強している。

冬馬「ねえちゃん勉強頑張ってるから、ねえちゃんの服も畳んどいてやったよ」

と、洗濯物を渡す。

夏海「ありがとう！！たまにはいいところあるじゃん」

と、感激する。

冬馬「まーね」

と、こちらは別の理由でニヤけが止まらない。

夏海「あれ、これ私のじゃないよ？冬馬のじゃない？」

夏海が一番上のシャツを冬馬に返そう
と持ち上げると、その下に大きなクモ
がいる。

夏海「ギイヤアアツツ！ クモクモクモク
モ！」

夏海の大絶叫とともに洗濯物が宙を舞
う。

腰を抜かして震え上がる夏海を見て、
冬馬は腹を抱えて大爆笑。

冬馬「アツハハハ。やっぱねえちゃんおど
ろかすのが一番おもしろいわ！」

夏海「驚かす……？ ああーっ！ まさか……
……！」

冬馬は床に落ちたクモのおもちやを拾
い、ニヤニヤしながら見せつける。

冬馬「ねえちゃんチヨロすぎ！」

冬馬、リビングへ走っていく。

夏海「待ちなさい冬馬！ 今日こそは絶対許
さないから！」

と、鬼の形相で追いかける。

○（夏海の回想）同・リビング（玄関（夜）

リビングを逃げ回る冬馬とそれを追いかける夏海がバタバタと走り回る。

七海「二人とも！ 下の人に迷惑だから走り回らないで！」

しかしその声は夏海と冬馬の耳には届いていない。

その賑やかな様子を楽しむように、春樹も母の背中で手足を動かして笑っている。

その時玄関のドアが開いて父・秋悟の声が聞こえる。

秋悟の声「ただいまー！」

冬馬「あ！ 父さんだ！」

それを聞いた冬馬は一目散に走っている。

夏海「待ちなさいってば！」

と、夏海も玄関に行く。

冬馬、秋悟（32）に勢いよく飛びつく。

冬馬「父さんおかえりー！」

秋悟、冬馬を抱き止め、そのまま片手で抱える。

秋悟「ただいま、冬馬」

と、冬馬の頭を撫でる。

夏海「お父さんお帰りなさい！　冬馬が逃げないようにそのまま捕まえといてね！」

秋悟「なんだ、また夏海を怒らせたのか？」

と、冬馬に聞く。

冬馬「違うよ。せっかくねえちゃんの洗濯物畳んでやったのに、ねえちゃん床に落としてぐちゃぐちゃにした！」

夏海「それは冬馬のせいでしょ！　聞いてよお父さん、さつきね」

秋悟、まだ靴も脱がずに夏海と冬馬の話をニコニコしながら聞く。
そこへ春樹を抱っこした七海もやってくる。

七海「夏海も冬馬も、まずはお父さんを家に上がらせてあげて？　おしゃべりはご飯食

べながらゆっくりね」

夏海と冬馬「はい／＼はぁーい！」

さらに春樹も声を出す。

春樹「あう！」

まるで本当に返事をしたようなタイミングに、夏海たちは笑いに包まれる。

（夏海の回想終わり）

○本田家・リビング（夜）

夏海、テーブルに腕を敷いて眠っている。

夏海「心配かけてごめんね、冬馬……」

と、寝言。

○入谷高校・職員室前

夏海が「失礼しました」と職員室を出ると、廊下でバッタリ刑事・滝口（32）に会う。

滝口「あ！この前の石頭の子！」

夏海「チンピラ刑事さん！」

滝口、夏海の覚え方にガクッと崩れる。

滝口「どこのどいつだそんな治安悪そうな刑

事は！俺か！」

夏海、滝口のセルフツツコミに手を当

てて小さく笑う。

滝口「改めて、入谷署生活安全課の滝口だ。

よろしくな」

夏海「入谷高校2年A組の本田夏海です。先

日はありがとうございました」

滝口「怖かっただろ。大丈夫か？」

夏海「私はなんともないんです……」

と、浮かない表情。

滝口はその理由を察する。

滝口「凜のやつ、学校来てないんだってな」

夏海「はい……」

滝口「まったくアイツは……」

夏海、自分を責めるように拳をギュッ

と握りしめる。

夏海「滝口さん、西山くんとは前から知り合

いなんですよね？」

滝口「アイツが中学の頃から知ってるよ」

夏海「じゃあどこか西山くんが行きそうな所に心当たりはないですか？」

滝口は顎に手を当てて首を傾げる。

滝口「そうだなあ……昔はゲーセン、カラオケ、ファミレス……それから図書館にいた時期もあったな」

夏海、新しい情報に目を丸くして喜ぶ。

夏海「図書館ですか……！ありがとうございます！」

凜を本気で心配する夏海を見て、優しく目を細める。

滝口「本田さん」

夏海「はい？」

滝口「こんなお願いをするのは変かもしれないけどさ。ウザがられても、拒絶されても、どうかぶつかり続けてやってほしい。アイツすぐ一人で背負って解決しようとするから、世話焼きすぎるくらいがちょうどいいんだよ。どうか凜を一人にしないでやって

くれるか？」

夏海「夏海、すぐに誇らしげに口角を上げる。

夏海「へ張り切って」任せてください！ お

せっかいは私の専売特許なので！」

滝口「ハハッ。それは頼もしいな」

○さわむらキッチン・店内（夜）

夕飯の駆け込み客が落ち着いた店内。

一人の男子高校生が入店する。

夏海「いらっしやいませ：：あ、山本くん！

愛流はどこか居心地悪そうに夏海がい

るまで来る。

愛流「・・・西山、五丁目のガソスタでバイ

トしてる」

夏海「西山くんが！？」

愛流、頷く。

愛流「・・・確かに伝えたからな。この前は

巻き込んで悪かった。じゃ」

それだけ言い残して足早に店を出よう

とする愛流を夏海が引き止める。

夏海「山本くん！良かったらお弁当どうですか？サービスしますよ！」

夏海の純粋な眼差しと、カウンターの奥から覗く店主・澤村千恵（60）の視線に押し負ける愛流。

愛流「……じゃあこれ」

と、唐揚げ弁当を夏海に渡す。

夏海「五百円になります」

夏海、ビニール袋に愛流の唐揚げ弁当と、カウンターからカップに入ったスーぷとごはんの容器を一緒に入れる。

愛流「ちょ、なんだよそれ」

夏海「お弁当一つ買ってくれたので、もう一つはサービスしちゃいます。参鶏湯風お茶漬け弁当です」

愛流「いや、そんなサービス聞いたことねえし……いらねえよ」

夏海「お仕事とかで夜が遅くなる女性から特に人気のお弁当なんです。良かったら」

愛流、「仕事で夜が遅くなる女性」が

一体誰を指しているのか気づく。

想像以上の夏海の世話焼きぶりに思わず笑ってしまふ。

愛流「ハッ。マジでおせっかいなやつ」

そう言いながら袋を受け取って店を出る。

夏海「ありがとうございます！　またいつでも来てください！」

○同・店の前（夜）

愛流「まあ俺も、人のこと言えねえか」

ガラス越しに店の中から手を振ってくる千恵と夏海を横目に歩いて行く。

○大通り・ガソリンスタンド・前（夜）

バイトを終えて着替えた凜が止めていたバイクの方に行くと、そこに夏海が立っている。
凜、夏海を見て目を見開く。

夏海「こんばんは」

と、頭を下げる。

凜「・・・なんでここにいんだよ。拓海たちにも話してねえのに」

夏海「誰かは言えませんが・・・とある情報筋からのタレコミがあつて・・・」

夏海の言い方に凜はフツと笑う。

凜「夏海にそんな情報網があつたなんてな」

夏海、凜が笑つてくれてホツと肩の力を抜く。

凜「・・・この前は怒鳴つて悪かつた。あん時はどうかしてた」

夏海「私が悪いんです。西山くんが怒つたのは当然です・・・でも信じてください！　西

山くんに戻してほしかったわけじゃないんです、本当に！」

凜は静かに首を縦に振る。

凜「夏海が言いたかつたことはちゃんと分かつてる。あん時俺が手出さなかつたのは・・・また歯止め効かなくなつた姿を見せたくなかつた」

夏海「また……？」

凜「あの野郎が言ってた通り、俺は中三の時、学年主任だった男を顔面骨折で全治三ヶ月にした。手エ血まみれにして殴り続ける姿は、相当怖かったと思う」

と、まるで誰かを思い浮かべるように話す。

夏海「……でも西山くんがそうしたのは、何かよっぽどの理由があったからですよ

ね？」

凜「……さあな」

夏海、何があったのか聞こうと口を開きかけて止める。

夏海M「ダメダメ、こうやってすぐ踏み込むうとするところが私の悪い癖だ……！」

夏海、口を堅く結んで堪える。

凜、そんな夏海の様子を察して、
凜「……ちよつと長い独り言、言ってもいい
か？」

と、提案。

夏海、凜が不器用ながらも心を開こう
としてくれるのが嬉しくて、愛おしそ
うに目を細める。

夏海「はい！」

と、頷く。

○（凜の回想）西山家・和室（夜）

T「二年前」

凜（15）、仏壇の前に腰を下ろして
胡座をかく。口の端は切れて血が滲み、
目元や頬には青アザができている。仏
壇には笑顔の母・琴美（43）の写真。
その後ろから秀樹（44）が声をかけ
る。

秀樹「いつまでそうやって暴れるつもりだ。

今のお前を見て母さんはどう思うだろうな」

凜「アンタこそ一体どのツラ下げて毎日手合

わせてんだよ。母さんの最期よりも仕事優

先したヤツが」

と、睨む。

凜の追及に秀樹は黙る。

凜 M 「母さんが死んでから、俺は分かりやすく荒れてた」

○（凜の回想）中学校・3年3組・中（休み時間）

凜、机に突っ伏して寝ている。

男子生徒1 「アイツまた警察に補導されたらしいよ」

女子生徒1 「えーヤバー！」

女子生徒2 「親は何してるんだろーね」

男子生徒2 「西山の父親ってどっかの校長やってるって」

女子生徒3 「お母さんは小学生の頃亡くなっ
たらしいよ」

男子生徒3 「（察する）あー」

凜が寝てると思い好き勝手言うクラス
メイト。

そんな中、周囲の視線を気にすること
なく凜の席まで行く吉田光莉（14）。

光莉「西山くん」

と、肩をトントンとする。

凜、不機嫌そうに顔を上げる。

凜「……なんだよ」

光莉「進路希望の紙、あと出してないの西山

くんだけなんだけど……」

凜「……んなモンねえよ」

光莉、再び睡眠に戻ろうとする凜を止

める。

光莉「じゃあ一緒に……新しい紙もらいに行

かない？」

すると凜が勢いよく立ち上がり、椅子

が大きく音を立てる。

凜「（鬱陶しそうに）そんなもん出してなん

の意味があんだよ。ほっとけ」

光莉「あ、待って！」

光莉、教室を出て行く凜を追いかけてよ

うとするが、

女子生徒1「やめときなよ」

と、止める。

男子生徒1「西山に話しかけるとか正気かよ」

男子生徒2「さすが生徒会長様はちげえわ」

冷やかしの拍手が起こる中、光莉は何か言いたげに眉をひそめる。

○（凛の回想）同・プール（休み時間）

五月晴れのあたたかい日差しの中、凛はプールサイドで仰向けになり昼寝している。

そこへ光莉が息を切らしてやってくる。

光莉「いたーっ！」

凛「……チッ。またお前か」

凛は光莉の姿を確認し、迷惑そうに寝返りをうつ。

光莉「お前じゃなくて、吉田光莉！」

凛「……へうぜえ」今度はなんだよ」

光莉「これ預かってきたよ」

と、真っ新たな進路希望調査書を凛に見せる。

光莉「北村先生、締め切り延ばしてくれらるっ

て！」

凜「いらねえ、ほっとけつつたろ」

凜、光莉が持っていたプリントを払う
と、プリントは光莉の手を離れて風で
ヒラヒラとプールの方に落ちて行く。

光莉「あ！」

と、反射的に反応してプリントに手を
伸ばしながらプールに落下。

凜、バツシャーーンという音で何事か
と起き上がる。

光莉はプールの中からプリントを持っ
た手を高く伸ばしている。幸いプリン
トは濡れていない。

光莉「へ嬉しそうに～セーフ！」

しかし制服のまま水に浸かっている光
莉を見て、

凜「……アウトだろ」

と、突っ込みながら、さすがの凜も仕
方なく光莉向かって手を伸ばす。
しかし光莉は「はいっ！」とプリント

を渡してくる。

凜「……そっちじゃねえ」

凜は受け取ったプリントをプールサイドに放り、再び光莉に片手を伸ばす。

光莉「ああー！」

と、何かを理解したように凜の手を握る。

凜の力を借りてプールサイドに上がるかと思いきや、両手で凜をプールに引っ張りこむ。

凜、バシャーンと水飛沫を立ててプールに落下。

制服ごと水に浸かる。

凜「……おい。何すんだよ」

と、眉をひくつかせる。

光莉「えっ！？　だって手伸ばしてたから、西山くんもプール入りたいのかと思って……」

……

凜「なわけねえだろ！　頭いいくせになんで

そうなんだよ！」

光莉「やだ、ごめん！！でもほら、私もびしょ濡れだから許して……！」

と、顔の前で両手を合わせる。

ふざけているわけではなく、至って真

面目な光莉に、怒る気が失せる凜。

凜「……変なヤツ」

と、呆れながら水に濡れた髪をかきあげる。

光莉、凜の様子を伺いながら、

光莉「……頼まれてもないのに勝手なことしてごめんね。でも、もし西山くんが進路のことで悩んでるなら、うち親が学習塾やっつけて家に高校とか大学の資料たくさんあるから、何か役に立てると思って！」

凜、得体の知れないものを見るような目で光莉を見つめる。

凜「……お前さ、何が目的なんだよ。俺に関わってもロクなことねえぞ」

光莉「目的はもちろん、西山ちゃんと仲良くなるためだよ！」

と、当たり前のように言い切る。

凜、呆れを通り越して口元が緩む。

凜「聞いた俺がバカだったわ」

と、仰向けになって水に浮かぶ。

光莉も真似して浮かびながら空を見つ

める。

光莉「私、またここに来てもいい？」

凜「やめろ……つつつてもどうせ来んだろ」

光莉「あはは、バレてる」

凜「……好きにしろ。俺の場所じゃねーし」

光莉「ありがと！」

と、喜びを噛み締める。

○（凜の回想）同・プール（翌日）

凜がプールサイドで寝転んでいると、

単語帳を持った光莉がやってくる。

凜、片目を開けて

凜「……ほんとに来たのか」

光莉「お邪魔します」

と、凜のそばに座って単語帳を開く。

その様子を眺める凜。

凜「……そんな顔して単語帳読むやつ初めて見た」

光莉「え、そんな顔ってどんな顔！？」

凜「なんか、楽しそうな顔。マジで勉強好きなんだな」

光莉、どこか嬉しそうに頷く。

光莉「知識が増えるたびに世界がちよつとずつ広がっていくのがすごく楽しいんだ。それで先生の所にもよく質問に行ってたんだけど、みんなには内申稼ぎって思われてるみたい」

と、苦笑。

凜「アイツなら言いそうだな」

光莉「それで最近は図書館の学習室に通いつめてるの。西山くんも良かったら一緒に行かない？」

凜「いや、やめとく」

と、即答。

光莉「ちよつとくらい迷ってくれてもいいじ

やん」

口を尖らせる光莉の顔に、凜がフツと口元を緩める。それにっられて光莉も小さく笑う。

○（凜の回想）同・3年3組・ベランダ

ベランダからプールの様子を眺めるクラスメイトたち。

男子生徒1「あれ西山と会長じゃね？」

女子生徒1「ほんとだー！」

男子生徒2「最近あの二人よく一緒にいるよ

な」

女子生徒2「どうせ内申のためでしょう」

女子生徒3「質問したいとか言って一年の頃

から先生に媚び売ってたもんね」

男子生徒3「女子怖ェ」

と、茶化す。

○（凜の回想）同・3年3組・中

光莉が教室に戻ると、黒板の前で何人

かの男女が相合傘を描いて盛り上がった。
傘の下には凜と光莉の名前。

男子生徒1「なあ、会長って西山と付き合っ
てんの？」

光莉「：：そんなじゃないよ。こういうの
は西山くんに迷惑だからやめてほしい」

光莉が黒板消しで消そうとすると、そ
れより先に男子生徒2が黒板消しを横
取りしてそれを阻止。

女子生徒2「だから言ったじゃん」

女子生徒3「どうせ内申稼ぎのために西山利
用してるんでよ？ 一年の時から北村のと
こによく通ってたしね」

光莉「それはただ質問しに行っただけで！」

男子生徒3「そんなこと言って、ホントは先
生と何してたんですか？」

一部の生徒の悪ノリのせいで收拾がつか
なくなる。

その時、扉が開いて凜が入ってくる。
凜の姿を見てクラスは一瞬で静まる。

凜「おい」

と、騒ぎの中心核である男女に近づく。
生徒たちは殴られると思い狼狽える。
男子生徒3「な、なんだよ」

凜、黒板の右端に書かれている日直の名前を見る。そこには西山の文字。

凜「チツ：俺の仕事増やすんじゃないやねえよ」

と、黒板消しを使わずに素手で落書きを大胆に消し、「きったね」とチョークの粉を払う。
光莉を含め、クラスは凜の大胆な行動に目を見張る。

凜「：：ひとつ言っとく。光莉はな、俺なんか使って評価上げる必要なんてねえから。そもそも俺にそんな価値あるわけねーだろ。だから、もう二度とくだらねえ噂立てんな」と、吐き捨てて教室を出て行く。

○（凜の回想）同・廊下

凜が歩いていると、後ろから光莉が追

いかけてくる。

光莉「待って西山くん！」

と、凜の手を掴んで止める。

凜「アイツらにはあれくらいハッキリ言った

方がいいんだよ」

光莉「じゃなくて！ さっき光莉って、初め

て名前ですんでくれたよね！」

と、目をキラキラさせる。

光莉の予想外の反応に凜は思わず笑う。

凜「そっちかよ」

光莉「だって嬉しいもん！ 私も凜って呼び

たい。いい？」

凜「どうせ呼ぶ気満々だろ」

光莉「まーね！」

と、ご機嫌。

凜も満足げな顔で光莉を見つめる。

すると光莉は改まってポツリと呟く。

光莉「凜、さっきはありがとうね」

凜「……おう」

と、珍しく素直に頷く。

○（凜の回想）同・3年3組・中（後日・夕方）

ホームルームが終わり、次々と生徒が帰っていく。

光莉も帰り支度をして凜の方を見ると、凜は机に突っ伏して爆睡。

光莉 M 「フフツ、また寝てる」

光莉が凜を起こしに行こうとすると。

北村 「吉田！ ちょっといいか？」

学年主任の北村（37）が光莉を呼びに来る。

光莉 「はい！」

光莉、鞆を置いて北村についていく。

○（凜の回想）同・生徒指導室・中（夕方）

机を挟んでパイプ椅子に座る北村と光莉。

北村 「最近西山のこと気にかけてやってるんだな」

光莉 「西山くんと仲良くなりたくて、ただ私

が一方的に話しかけてます」

と、苦笑。

北村「だけど他の先生方はあまりよく思っていないらしい。西山が吉田の害になるんじゃないかって心配してるぞ」

光莉、膝の上で拳を握る。

光莉「へ一生懸命に」確かに西山くんによくはない噂があるのは知ってます。でも最近はこちらと学校に来て、たまに寝てるけど、授業も受けてるんです！」

北村「もちろん俺は分かってるよ。だけど他の大人たちがなあ：：PTAからは西山を退学させるべきなんて話まで出てる」

光莉「退学：：義務教育なのにそんなことできるんですか！？」

北村「建前としては転校、実際は自主退学に追い込む形になるだろうな」

光莉「そんな：：先生、なんとかできないですか！？」

光莉の切実な願いに北村が折れる。

北村「他ならぬ吉田の頼みなら、聞かないわけにはいかないな」

と、優しく笑いかける。

光莉、パツと顔を明るくする。

光莉「ありがとうございます！もし私にできることがあれば言ってください！なんでもやります！」

北村「・・・じゃあ、一つ頼んでもいいか？」

光莉「はい！」

○（凛の回想）同・3年3組・中（後日・夕方）

机に突っ伏して寝ていた凛が顔を上げると、ほとんどの生徒は下校していて教室には女子が三人残っているだけ。ふと光莉の席を見ると、鞆がまだ残っている。

凛 M 「どっか行ってんのか……？」

光莉を探しに教室を出ようとする凛に、女子の一人が声をかける。

女子生徒1「光莉ならキタムーに呼ばれてっ
たよ」

女子生徒3「二人で何してんだろぅねえ」

と、含みをもたせた言い方をする。

凜「くだらねえ噂立てんのやめろつつたよ
な？」

と、怒りを滲ませる。

女子生徒2「（小声で）ちょっと」

と、止めようとするが女子生徒3は怯

まない。

女子生徒3「悪いけど、私別に光莉のこと悪

く言いたいとかじゃないから」

凜「ならなんだよ」

女子生徒3「北村、自分好みの生徒を取り込
んで手出してるってウワサがあるんだよ」

しかし凜は鼻で笑う。

凜「妬んでる奴が考えそうな話だな」

女子生徒3「……だったらいいけどね？」

急に胸騒ぎがする凜。

○（凛の回想）同・生徒指導室・中（夕方）

光莉、手足を手錠でパイプ椅子に縛られて
いる。

光莉「先生：：説明会で流すインタビューを
撮るんですよ：：？」

拘束を解こうと椅子をガタガタとさせ
る光莉の口に、北村は「しーっ」と言
いながらガムテープを貼る。

片手にスマホを構えて動画を撮りなが
らゆつくりと光莉のYシャツのボタン
を開けていく。

北村、鼻息を徐々に荒くしながら、

北村「へえ。中学生なのにこんなエロい下着
着けてたんだ」

北村は下着の上から光莉の胸を乱暴に
弄る。

その強さに顔を歪める光莉。

北村は背中に手を滑らせ、下着のホッ
クに手をかける。もうダメだと光莉が
顔を逸らした時、外から何者かが部屋

の扉をドンドンと叩く。

凜の声「光莉！　大丈夫か！？　」

その声に光莉の目尻から涙がこぼれる。

北村、慌てて光莉の制服を元に戻そうとするが、その間に凜がドアを壊して中に入ってくる。

目の前には手錠をかけられた光莉と、光莉のシャツに手をかけている北村の姿。

凜「テメエ……覚悟はできてンだろうな！」

目の前に広がる光景に凜の怒りが爆発。北村を床に叩きつけ、馬乗りになって何度も顔に拳を振り下ろす。

あたりには北村の血が飛び散り、北村はそのうち動かなくなる。

それでも北村を殴り続ける凜。

光莉「もう大丈夫だから！　それ以上やったから死んじゃう！」

と、止めに入る。

凜、拳を下ろしたものの、肩で息をし

ながらまだ怒りを宿した目で北村を見下ろす。

光莉「凜、ごめんね……本当にごめん」

と、涙をこぼしながら謝る。

凜「（辛そうに）なんで光莉が謝んだよ」

凜は光莉の涙を拭こうと手を伸ばすが、光莉がビクッと怯えたため、触れずにそっと手を戻す。

○（凜の回想）警察署・相談室・中（夜）

パイプ椅子とテーブルだけの殺風景な部屋。

凜、パイプ椅子に浅く腰掛け、無意識に机を指先でトントンと叩く。

そこにドアをノックして刑事・滝口が入ってくる。

凜、反射的に立ち上がる。

凜「どうなった？」

滝口「教師殴った件は不問になったから安心しろ。せいぜい自宅謹慎くらいだ」

凜「俺のことはどうでもいいんだよ。アイツは！？」

滝口「教師の方は証拠の動画があるし、これまでの被害者の証言も揃えば、刑事事件として捜査が進むだろうな。教員人生は終わったも同然だ」

凜「……なら良かった」

凜は心底安心した様子で深く息を吐き、テーブルに両手をつく。

滝口「こんな時間まですまん。送ってくぞ」

凜は椅子の上のカバンを持って、

凜「……いい。いつも迷惑かけて悪い」

と、呟いて部屋を出る。

○（凜の回想）同・廊下（夜）

既に照明が落とされて暗く静かな廊下をとぼとぼと歩く凜。

ポケットに手を突っ込むと、折り畳んだ紙が入っていることに気づく。

凜はそれを開き無表情で見つめた後、

ぐしゃりと握りつぶして廊下の途中に設置されている燃えるゴミ箱に投げ入れられる。

ゴミ箱の中で少しだけ開いた用紙からは、「路希望」の文字が覗く。

（凧の回想終わり）

○公園・中（夜）

誰もいない静かな公園で、ブランコに座る夏海と凧。

凧、長い独り言を言い終わると、ブランコをこぎ始める。

凧「自分のやったことに後悔はねえ。けどあの時、アイツを怖がらせてたのは他でもない俺だった。（自分を責めるように）助けたつもりが、アイツの心に余計な傷を増やした……」

凧はさらにブランコを加速させ、上がったタイミングで飛び降りて着地する。

凧「……悪い、こんな時間まで付き合わせて。」

帰るか」

しかし夏海はブランコに座ったまま動かない。

凜「夏海？」

すると夏海はブランコから立ち上がり、真っ直ぐと凜を見る。

夏海「この前西山くんが助けに来てくれた時、それまで本当は不安だった気持ちに吹き飛んで、心の底からホッとしました。きっとそれは彼女も同じだったと思うんです！だから、関係ない私がこんなことを言うのはおかしいかもしれませんが……変態クソヤロー教師から彼女を助けてくれて、ありがとうございますごさいました！」

と、真っ直ぐな笑顔を向ける。

凜、意表を突かれて目を瞬かせるが、長い間心の奥に引っかかっていたものがようやく解けたように頬を緩める。

凜「……まさか夏海の口から『クソヤロー』

なんて言葉が聞けるとは思わなかったわ」

夏海「クソヤローじゃ足りないくらいです

よ！もっと語彙を増やさないと……」

そう言っつて真剣に意気込む夏海の頭に、

凜が優しくチョップする。

凜「そんな変な語彙はいらねーから」

可笑しそうに笑う凜につられて、夏海

も笑みをこぼす。

夏海「それもそうですね」

○山本家・リビング（深夜）

愛流の母・陽子（34）が飲み疲れて

帰ってくる。

それなのに、冷蔵庫を開けて缶ビール

を取り出す。

しかし、プシュッと蓋を開けたところ

で愛流が横から奪う。

陽子「起きてたんだー私のビール返してえー」

と、手を伸ばす。

愛流、ため息をついて、

愛流「酒を水みたいに飲むのやめろよ。これ

食ってさっさと寝ろ」

と、夏海からサービスされた参鶏湯風

お茶漬けをテーブルに出す。

陽子、湯気の香りを嗅ぐ。

陽子「サムゲタン？　どうしたのコレ」

愛流「・・・同級生のバイト先で弁当買った

らもらった。二日酔いにも効くんذار？

よく知らねえけど」

陽子「へニコニコしながら」愛流優しいじゃ

ーん」

愛流「・・・もう若くねえーんだから、あんま

無理すんなよ。俺もバイト始めるから」

そう言っつて自分の部屋に戻っていく。

リビングに残された陽子、出された参

鶏湯の前に座ってスープをひと口飲む。

陽子「・・・ああうま」

と、目に涙を溜めてスプーンを進める。

○入谷高校・2年A組・中（休み時間）

聖也「あれ？　凜は？」

龍太郎「トイレじゃねーの？」

すると突然校内放送が流れる。

凜の声「あー、あーあー」

その声を聞いてクラスが騒つく。

夏海「西山くん！？」

聖也「何やってんだ？」

○同・職員室

教師たちも突然の放送にざわつく。

凜の声「黒糖会のやつら、聞いてんな？」

教師1「この声……西山か！」

教師2「一体何をしてるんだ！」

すると校長・西山秀樹（46）が職員

室の扉を勢いよく開ける。

秀樹「すぐにこの放送をやめさせるように！」

教師1「は、はいっ！」

と、行こうとするが、横で中村康太

（36）が立ち上がる。

中村「俺が行ってきます。うちの生徒なんで」

○同・2年A組・中

凜の声「黒糖会のやつら、聞いてんな？」

聖也「こくりゅう会だぞ凜」

と、スピーカーに向かって叫ぶ。

拓海「ほんと興味ないことは覚ええないな」

と、笑う。

○同・廊下

放送室に行つて凜を止めるはずの中村

は、廊下の窓を開けて呑気にタバコを

吸いながら放送を聞いている。

凜の声「お前らが夏海を巻き込んだことは一

生忘れねえから。次俺の大事なやつに手出

したら……分かってんな？ 以上、西山凜」

中村、青空に向かって煙を吐く。

中村「青春だねエ」

○同・2年A組

凜の声「お前らが夏海を巻き込んだことは一

生忘れねえから。次俺の大事なやつに手出

したら：：分かってんな？　以上、西山凜」

放送を聞いて聖也は大はしゃぎ。

聖也「今大事なやつって言った！？　俺の聞

き間違いじゃないよな！？」

他のクラスメイトも「ヒューヒュー！」

と囃し立てる。

龍太郎「なんでお前がそんなに嬉しそうなん

だよ」

と、ハイテンションの聖也に笑いなが

らツッコむ。

聖也「だってあの凜がなっちゃんのこと『大

事なやつ』って言ったんだぜ？　テンシヨ

ン上がるだろ！　なあ、なっちゃん？」

夏海に話を振ると、夏海は頬をじんわ

り赤くして、ほくほくした表情でポー

ッとしている。

それを見て聖也たちは「もしや」と、

視線を合わせる。

そこで凜が教室に戻ってくる。

聖也「（わざと）凜、カッコ良かったぜ！

『お前ら、俺の女に手出すなよ？』だっ
け？」

と、凜の真似をしながら肩に手を回し
てダル絡みする。

凜「（呆れながら）どんな耳してんだよ」

聖也「照れんなって」

凜「照れてねえ、つか重い」

と、聖也を引き剥がす。

そんな中、夏海が意を決して凜に声を
かける。

夏海「（緊張しながら）あ、あの……西山く

ん……！」

凜「ん？」

どこか恥ずかしそうに緊張している夏

海に、聖也たちだけでなくクラスが沸

き立つ。

クラスメイト1「いいぞー本田！」

クラスメイト2「さっさと言っちゃまえ」

夏海が凜に告白すると思い、クラス全

体が期待しながら見守る。

夏海「……もしかして私も西山くんたちの仲間として認めてもらえたと思っていいんでしょうか！？」

と、目を輝かせながら聞く。

夏海の質問にクラスが一瞬で静まり返る。

夏海、すぐに自分が頓珍漢な質問をしたと気づくが、

夏海「へ慌てて」それはさすがに自惚れすぎですよね！調子に乗りました！すみません……」

と、さらに勘違い。

「プッ」という凜の笑いが静寂を破る。
凜「改まってなんの話かと思えば、そんなこと気にしてたのか」

夏海「え？」

龍太郎「なっちゃんそれは今更過ぎ」

拓海「本田さんはもうとつくに俺たちの大事な仲間だよ」

聖也「そーそー！」

夏海、凜たちの言葉を聞いてパアッと笑顔になる。

夏海「ありがとうございます！」

話が落ち着いたところで、聖也が残念そうに口を開く。

聖也「な〜んだ。俺はてっきりなっちゃんが

凜に：：んごっ！？」

余計なことを言いそうになった聖也の口に龍太郎が焼きそばパンを突っ込む。

聖也「あいうんあお！へなにすんだよ！〜」

夏海「大丈夫ですか！？」

凜「夏海が俺にどうしたんだよ」

と、不審がる。

拓海「あぁー：：、ほら焼きそばパン！　　購

買に買いに行くの付き合ってほしいんじゃないかって：：本田さんまだ食べたことないだろうし」

と、無理やりこじつける。

夏海、口に突っ込まれた焼きそばパンをもぐもぐと食べ続ける聖也を見て、

夏海「食べたことないです！　　すごく美味し

そうですね！」

龍太郎「じゃ、じゃあ良かった。ついでに俺

たちの分も頼むぜ！よろしく！」

凜「あ、おい！」

龍太郎は無理やり夏海と凜を教室から

追い出す。

聖也、ようやく最後のひと口を飲み込

んで、

聖也「二人とも、なあにたくらんだ？」

拓海「企むなんて人聞き悪いな」

龍太郎「俺たちはただ、二人のこれからに期

待してんだよ」

アイコンタクトをとって楽しそうに口

角を上げる三人。

（了）